自らの思いを温める図画工作科の指導

── 第3学年「ヒコーキにのって」の実践を通して ──

阿比留　時　彦

1．子どもの思いを温める

(1)　思いの質と感性

昨年起きた米の凶作は国民生活の転換を余儀なくされる出来事に展開してきている。連日のごとく流れるラジオ情報に耳を傾けると，次のような評が意識にとまった。

政府の行ってきた政策がここに来て将来的な見通しの甘さを露呈した。米作りから畑作へと奨励してきたある地域の行政が今後を見越して米作へと再度働きかけようとしているようだが，今更，転作する農家などありはしないというのである。その最たる理由として，農地整理や肥料の進歩，ことに，機械化により楽に大量の米がとれるようになったことが農家から汗水流して作る喜びや悲しみなどの米への思いを失わせたことに起因しているというのである。

かい摘まみ過ぎてはいるのだが，要は合理性への追求と人間がもつ相対としての心との関係に視点を当てたかったのである。環境に働きかけ，何かを創り出してきた人間にとっては，全てが合理的に解釈できない感覚や感情を有し，そのことがより人間らしい姿をかいまみせてくれている。

今日，人間が創り出した社会，もしくは生活体としての地球から，人間も含め全てのものたちがはみ出そうとしていると危惧するならば，そうしてきた私たちの内面を見据えた再認識の目をもたなければならない。本来あるべき人としての調和的発達を求めるのも，私たちの欲求の現れであると同時に責務と言えるのではないだろうか。

本校は，今年度から『豊かな感性を育む』をテーマに取り組んできている。図画工作科（以下，図工科とする）においても，広く，鋭敏な感性を視野に入れながら，授業レベルでは，子どもたち一人一人の思い，つまり，事象や対象への興味・関心・意欲などと深く結び付け，子どもたちのよさが発揮できる展開を意識してきた。自らを主体的にはたらかせることが活動を支え，その質的変換の根幹をもなすものととらえられている。そして，その中心をなす重要な役割を担うものを感性として位置付け取り組んできた。

(2)　個が生きる授業と図工科感性

今少し感性について，述べてみたい。

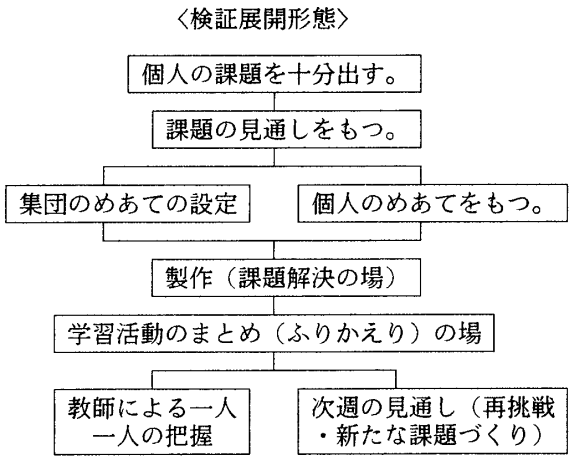
まず，感性のとらえであるが，黒田耕誠氏によると[1]，感性を次のようにとらえている。

感性とは感受性（五感などを働かせ，感じる・気づく）を出発点とし，自己受容（心を素直に見つめる）し，想像力で広げ，直感力で全体像に組み立てることであり，この3つの感性の中身が言葉・絵・歌あるいは表情・態度・行動などとなって表現されるとしている。そして，年齢に応じて広がり，渦巻きながら高まる可能性である，としている。つまり，感性を内在と表出の一連のつながりのなかにとらえようとしている。

また，片岡徳雄氏は[2]，感性を『価値あるものに気づく感覚』ととらえ，この感性から生まれる価値あるものに向かう感情としての情操と共に，従来の受け身的な構えとしてではなく，積極的な構えとしてとらえるべきこととを提唱している。

次に，この両氏の論を基本に据え，図工科としてどのような授業づくりを行えば，豊かな感性が育めるのかを考えてみたい。

① 主体的なめあて意識，設定の工夫



――『めあて追求の授業づくり』から――

感性を育む第一として，主体的なめあて意識をもつことが挙げられる。このことは，次へのより積極的な活動につながる橋渡しであり，子どもたち一人一人のめあて意識の在り方が，次への活動を左右することになるからである。

そこで子どもたちの経験や興味・関心を考慮した魅力ある題材の追求や（おもしろそう，してみたいな，おや？）といった，感受性を刺激する出会いの場の設定が工夫されなければならない。

この内，感性をはたらかせる意図的な場の工夫として，次のようなことが考えられる。

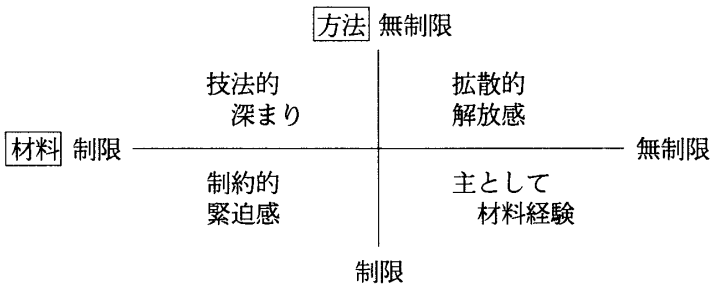
- 五感をはたらかせる。(ことに触覚を)
- 驚きを大切にしたり，考えを揺さぶったりする。
- 直接体験を大切にする。
- 具体物を利用する。
- イメージの広がり，心象をはたらかせる。

② 主体的表現のための選択の幅

次に感性をふくらませ，主体的な取り組みを進めるために，活動の場の工夫が必要となる。

子どもたちが主体的に想像力をはたらかせ，イメージを広げながら発想・構想をするためには，いろいろな方法や材料などの体験を豊かにする必要がある。このことは，自分の思いに照らして，思考・判断・試行・決定する積極的な活動を引き起こすのみでなく，自らを振り返る活動を踏まえることにもなる。

表現方法や材料の主体的な選択の幅をもたせることで，個性の発揮・拡散思考をねらいとした取り組みの必要性のその一方で，制約的な設定の場を用意し，条件思考・理解の深まりを図る活動を仕組むことが，新たな創意・工夫を生むことも忘れてはならない。



③ 評価と指導

子どもたち自らの感性に裏打ちされた評価は，自らの振り返りが基本になる。そして，自分の思いと活動とをしっかり比べてみることだと考えている。自己評価は無意識の中にも生じるものだが，ここでは，それぞれの活動における意図的・意識的な評価場面を設けることにより，意識の定着とそれに続く思いや活動を育んでいくことを大切にすべきだと考えている。

加えて，友達相互の評価場面や教師評価を加味していくことにより，子どもたち一人一人が心と

行動の質的変容につながる評価活動，つまり，自らをできるだけ客観的に顧みることで，意欲やさらなる活動の広がり・高まりが期待できるような評価活動を心掛けなければならない。

以上のことを踏まえ，本年度は主に，題材との出会いの場面に焦点を当て取り組んできた。題材との出会いの場面で子どもたちがさまざまな思いをふくらませ，活動の見通しを抱くような展開をと願って試みてきた。

2．指導事例

『ヒコーキにのって』[3)] ―― 感じたこと，想像したことを絵や立体に（3年生）

(1) 題材について

空高く飛び，見知らぬ世界へとつなげてくれる乗り物，ヒコーキ。ヒコーキという言葉には夢と現実をつなぐかけ橋のような魅力や響きがある。「もし自分だけのヒコーキがあったら・・子どもたちはどのようなヒコーキでどんなところへ行ってみたいだろう。この自分だけのヒコーキ（夢と現実を結ぶ乗り物）を画面上に立体構成することで，子どもたちを刺激し，自分の思いに基づく楽しい想像力をはたらかせて，飛んで行きたい所をイメージ豊かに広げ，絵や立体表現してほしいと願って設定してみた。

本学級の子どもたちは，既習学級の子どもたちが作製した作品が室内に展示してあるものを興味をもって見ており，（自分なら……）との思いを抱く子も少なくないようである。そのことを温めつつ，友達との関わりを大切にしながら，楽しい発想や構想を展開してほしいと願っている。

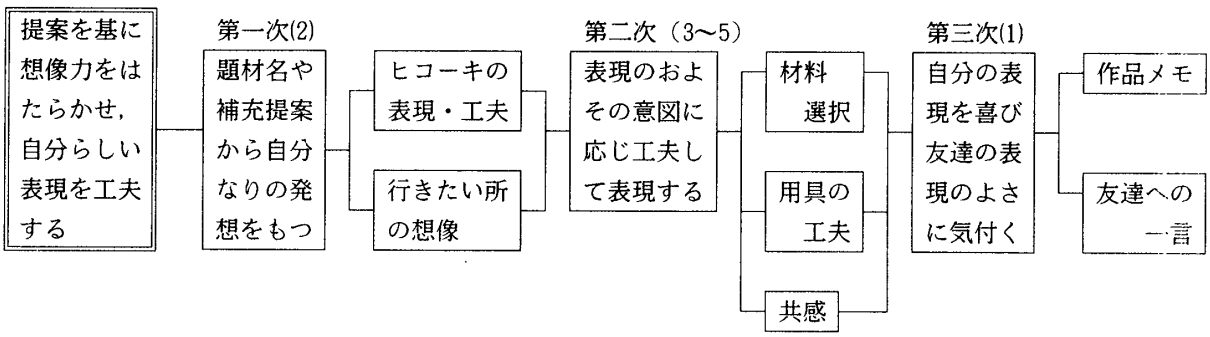
(2) 指導目標

1　自分らしい想像力をはたらかせて，楽しい発想や構想をする。

2　自分の思いに応じて，自分なりの技能や造形感覚をはたらかせて，ヒコーキやその世界の表現を工夫する。

3　自分の表現を温め，その喜びを味わうとともに，友達の表現のよさに関心をもつ。

(3) 指導内容と計画……6～8時間（本時　第一次　第1時）



(3) 本時の目標

想像力をはたらかせて，自分らしいヒコーキ（行たい所へ行くための乗り物）を工夫する。

(4) 授業設計の焦点

1　折り紙でヒコーキを作り，そこから自分だけのヒコーキに変身させる活動を通じて，作る↔考えるのサイクルを図り，ヒコーキの，そしてこのヒコーキで行ってみたい所のイメージを意欲的に広げてほしいと願っている。

2　子どもたちが意欲的に活動できるよう大きなヒコーキの提示（視覚的な興味付け）や試行する雰囲気を支えたり，友達どうしをつなげたりする言葉がけを大切にする。

3　本題材は画用紙（平面素材）に立体表現を組み込もうと試みるものである。子どもたちが想像したり感じたりすることを絵に限ることなく，材料や表現方法の選択・決定の幅を広げら

れる支援を図る。

(5) 準備

《子ども》はさみ，のり，サインペン，クレヨン，パス，身近な材料など

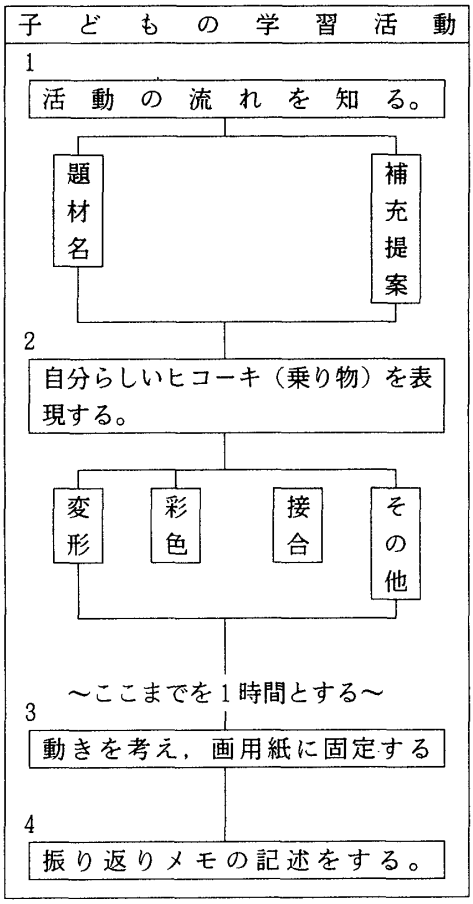
《教　師》身近な材料，折り紙，針金，画用紙，テープ類など

(6) 評価の観点

関心・意欲・態度	本題材の流れを知り，柔軟に，また，進んで創造活動を楽しもうとする。
発想・構想の能力	想像力をはたらかせて，自分らしい発想をしようとする。
創造的な技能	自分らしいヒコーキになるよう，試行・工夫しようとする。
鑑　　賞	自分らしい表現を温め，作り出す喜びを味わう。

(7) 学習の流れ

① 第一次（2時間）



（学習展開の概要……1／2時間）

T：今日は何を勉強するの。C：ヒコーキにのって……

板書「（自分の）ヒコーキにのって」

T：2組さんの作品がたくさん置いてあったの見た？

C：見た見た。針金に引っ付いてたの？あれなら見た。

T：製作上の手順を段階的に説明

1　折った紙ヒコーキを提示（ちがう折り方で2種類）
2　台紙と針金（位置や曲げの工夫，提案）
3　取り付け方について
4　時間計画・身近な材料の活用について

T：それでは今日は，ヒコーキを工夫しようね。みんなヒコーキ，作れるかな。

C：できる，できる。(男子，多数）わかんない……（女子の中から）教えてあげるから。(男子から）

T：グループごとに教え合いをしてできますか。

C：はい。教師による大きなヒコーキの提示やそれによる折り方指導は子どもたちの教え合いを大切にするため，とりやめる。

C：いろんな工夫が見られる。(後述）

飛ばしだす子，色ぬりやもってきたものを付けていいかと尋ねにくる子が出てきたところで。

T：もっと自分らしいヒコーキになるよう工夫してみよう。

C：変身カード記入後，さらに改良を加え始める。

（後述）

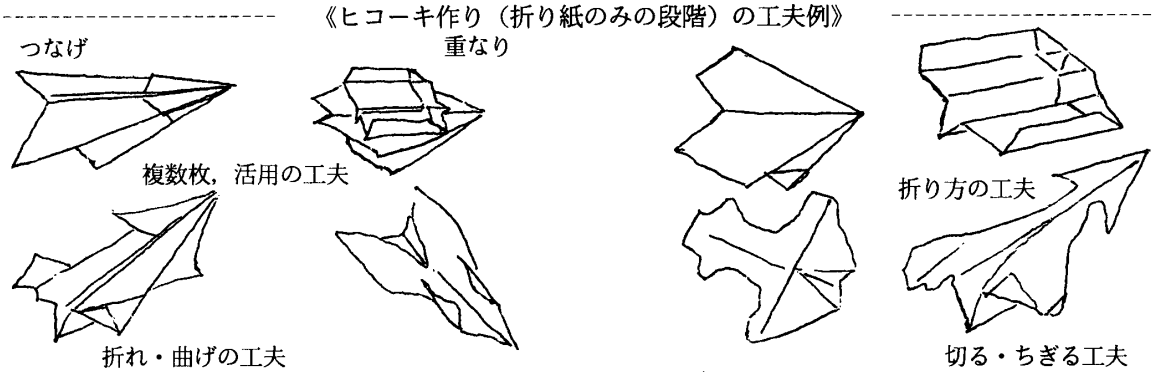
T：(子どもたちの製作途中で)「いいもの見せてあげようか。先生も作ってみたんだよ。」(重々しく箱を取り出しながら）C：見せて見せて。T：（教卓に集め，どんな作品か予想を話し合った後，目を閉じさせる。）ろくろの上に作品を乗せて回転させて見る。

C：（へえー，当たってたー，などの反応）席に戻り，活動

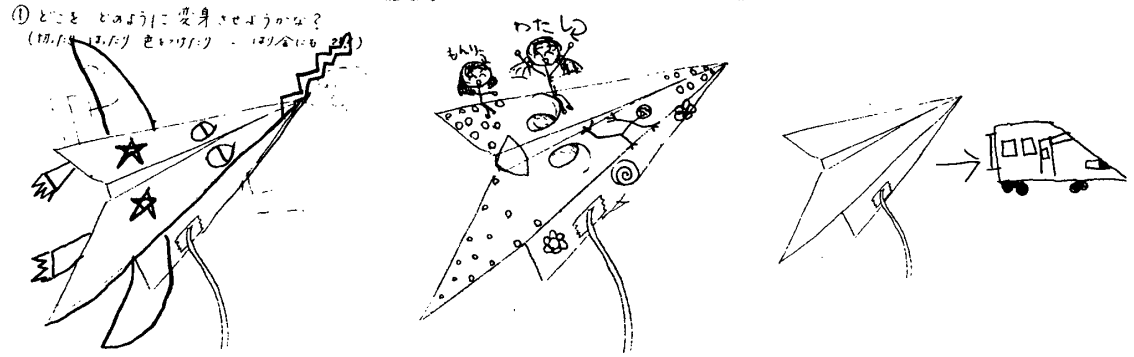
を再開する。

（以下，略）

《ヒコーキ作り（折り紙のみの段階）の工夫例》



《変身カードのワークシートから》



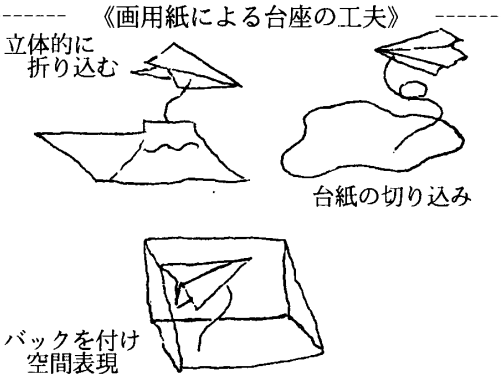
《着色材料活用段階での工夫》

- 着色による工夫（ヒコーキの模様づくり）
- 絵をかいて，張り付ける（自分・友達・動物・不思議な生き物たち）
- その他の材料活用（ボタン・ビーズ・竹ひご・ビニルテープ・他の折り紙など）

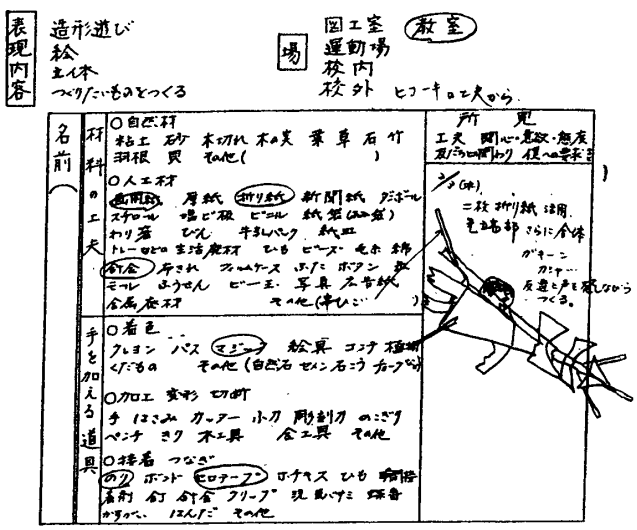
《針金への取り付け》

- ヒコーキの向き（上付き・下付き・ひねり）
- 針金の曲げの工夫

《画用紙による台座の工夫》

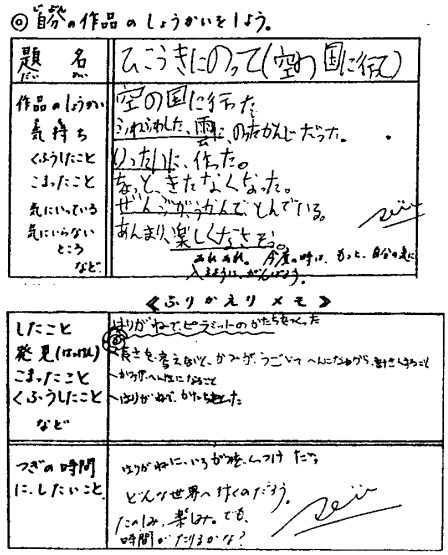


《教師による時後評価表記記入例》



② 第二次　行きたい所の製作

本学級は製作途中により，ここからは同学年他学級での過程を中心に紹介することにしたい。子どもたちは，自分らしいヒコーキづくりの過程を踏まえつつ，行きたい所を具体化していく。アイデアスケッチをもとに，必要な材料．用具の準備を行い，試行を繰り返しながら表現していった。友達のよいところを取り入れたり，材料の交換を行ったりと活発なやり取りが見られた。製作活動が早く済んだ子どもたちには，自分の世界を広げたり，小さな世界をもう一つ作る活動を促すことで，工夫した活動を展開していたようである。


◎自分の作品のしょうかいをしよう。

題名	ひこうきにのって（空の国に行く）
作品のしょうかい 気持ち くふうしたこと こまったこと 気にいっている 気にいらないところ など	空の国に行った。 うれしかった、雨にのってかんじだった。 りっぱに、作った。 なやましきたなくなった。 せんごがうかんでとんでいる。 あんまり楽しくなかった。

《ふりかえりメモ》

したこと 発見（はっけん） こまったこと くふうしたこと など	はりがねでピラミッドのかたちをつくった 長さを考えないで、かべがうごいてへんになったから、長さをそろえて へやがへんになってしまった はりがねが、かたかった
つぎの時間にしたいこと	はりがねにいろがみをつけたい どんな世界へ行くのだろう。 たのしみ、楽しみ。でも、時間がたりるかな？

また，学習の終わりには振り返りメモを書く活動を取り入れ，今日の活動の様子と次時への構えをもつようにしてきた。このことは本題材に限らず取り入れており，子どもたち自らが決定したことを自ら反省する，自己教育へつなげる生活習慣を重視してきたからである。

教師による評価表は，時後，気になったり，印象に残る子どもたちの活動をメモ書きすることで教師自身の振り返りメモとして活用するようにしている。

③ 鑑賞と作品メモ

製作途中の作品は，各学習時間の後片付けの段で，窓側に置き，終わりの挨拶の後，必ず，流れ見て歩く学習活動として位置付け，図工室を後にするようにした。

全過程終了後も，紹介メモに記入し窓側に陳列して鑑賞しあった。製作途中の子どもたちは休憩時間の活用を図り，仕上げていった。

4．考察　～第一次後の記述から～

第一次の製作活動後，以下の項目で学習の振り返りを行ってもらった。

① 今日のヒコーキの工夫は，楽しかったですか。

楽しい35人	ふつう３人	おもしろくない０人	記述 別になし１人

② 思ったようにヒコーキ（乗り物）ができましたか。

できた 23人	できたところ できないところがあった 15人	できなかった ０人	記述 別になし １人

③ 自分の前の友達の工夫やすてきな所はどこですか。

＿＿＿＿＿くん・さんの＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿のところ

・おもしろい形をしている　・ビーズを使ってまどをたくさんかいている
・かいた字を上に立てている　・両面に折り紙をはりつけて，いろんな工夫をしている
・スパンコールを使って，きれいにかわいくしている
・おもしろい人物を乗せている　・よく飛びそうなヒコーキ
・ヒコーキは人気があって，おもしろい　・しっぽをみつあみして作っている　など

この振り返りメモの結果を見ると概ね，楽しい活動として受け入れられていることが分かる。その理由として乗り物としてのヒコーキのもつ魅力や折り紙でヒコーキを折る⇔自分の工夫⇔台紙への取り付けと，一連の活動が子どもたちにとって，明確に意識された，分かりやすい題材であったのではないかと思われる。他学級の子どもたちの作品が本クラス活動の伏線ともなり，想を広げやすかったことも要因に挙げられるだろう。また，製作の流れを視覚的に説明したこと，時間計画や材料の活用，導入におけるヒコーキを折るという具体操作などが感じ・気づくなどの思いを自分なりのイメージへと広げやすくしたのではないかと考えられる。

思ったようなヒコーキ作りができたかどうかについては，自分の技能についての側面と適合する材料等の側面が考えられるが，身近な材料の中で，何ができるかを工夫することが，また，おもしろさにつながることも，①②からとらえられる。また，③は，友達の作品に意識的に着目することで次時へのヒコーキの改良やこのヒコーキで行ってみたい所の製作など，自分の表現（思い）を温めることと関わらせる準備練習として取り上げてみた。

次に検討課題について述べてみたい。

一つには，変身カードの活用方法である。折った紙ヒコーキをもとに，いち早く改良したい子どもたちにとっては，カードに書き込む活動がむしろじゃまになってしまった。カード記入による計画的な見通しを意図したが，子どもたちの多くがカードの書き込みに時間をかけていない実情をみると，具体活動そのものの継続を促し，カード活用は，選択の余地としての幅を持たせた方がよかったと考えられる。時間を割くことにより，製作への高まりがそがれる可能性となったと反省している。

二つ目には，教師の作成したヒコーキの提示の適否ないし方法である。今回は子どもたちの製作途中に提示することで，活動の雰囲気づくりと発想の幅を広げるヒントにと考えたが，逆に方向づける結果となってしまったかもしれない。また，自分の活動に夢中になっている子にとってはここでも活動時間を短くしてしまったことに不満が残るであろう。製作に戸惑いのある子どもたちへの提示やさりげなく置いておくこと，又は，提示しなくてもよかったかもしれないとも考えられる。

三つ目には，自分の表現を温めるための方法である。本時まとめでは振り返りメモの活用を図り友達作品に目を移すことから自分を振り返る方法をとってみた。しかし，これよりもグループでの少しのまとまった話し合いの時間を確保をし，自作ヒコーキの自慢話やどこへ行くのかなど意見の交流を図るほうがより積極的な活動の展開が期待できたのではないかと推察している。

以上，題材との出会いの場について考えてみた。今回は折り紙を折るという行為から心象表現の広がりをねらいとした活動を設定したみた。ヒコーキの工夫にのめり込む子どもたちの活動を見ながら，教師の指導という名のもとに，子どもたちの意欲や活動の流れ・高まりをそぐことのないよ

う，十分気をつけなければならないことを感じた。また，私自身が，子どもたちにつながる感性を温め，より豊かな感性を求め続ける存在でなければならないことを再確認し，次への学習活動に生かしていきたいと考えている。

《引用文献》

(1) 黒田耕誠『教育研究』筑波大学附属小学校初等教育研究会，通巻1097，1993年。

(2) 片岡徳雄『子どもの感性を育む』NHK　BOOKS，1993年，75～77頁。

(3) 佐々木達行『授業のネタ』日本書籍，1993年，50～52頁。

《参考文献》

・初等教育資料№594，平成５年４月号，52～53頁。

・筑波大学附属小学校研究紀要，Vol. 47，1991年。

・広島大学三原小学校研究紀要，第24集，1991年。

・北尾倫彦「自己教育力と自己評価」『児童心理』金子書房，昭和63年，27～34頁。

・高田利明「個性の拡がりを育み，支援する評価」『形』日文，222，1992年。